

2024年度 織田きもの専門学校 自己評価報告書

作成日 2025年4月1日

はじめに

2024年度の事業計画に対して、その進捗や達成度を確認する観点にて自己点検評価を実施した。
ただし、事業計画の内容の多くは単年度、短期的なものではなく、複数年にわたる長期的な視点での目標、計画である場合が多い。それらに関しては到達という観点ではなく、取り組みに対して真摯であったか、着実な歩みを進めているかどうかを評価の軸としている。

※なお、評価は4～1の数値にて表す。適切…4 ほぼ適切…3 やや不適切…2 不適切・未実施…1

教育理念に沿った理想的な学校とするべく、その過程における当年度の実績について以下に評価を報告する。

学校の理念と教育目標

理念 現代社会及び産業界において必要とされる人材の育成

目標

- ・「明るい挨拶良い返事」「低賞感微」を生活理念としたコミュニケーション能力の修得
- ・和服及び日本文化に関する幅広い知識と技術の修得

重点的に取り組んだ目標及び計画等

- ・毎日の実習で技術を向上させ、さらに各自が将来の就職を見据え、自ら選ぶことで授業への意欲が高まるように選択科目に取り組んだ。
- ・二本の柱。①日本文化の継承である「きもの」の基本を守る ②「きもの」の新しい世界への挑戦
- ・産学コラボレーション企画(SDGsに係るリメイクアイテムの製作・販売など)
- ・着物業界が集結したイベント「日本橋きものサローネ」「東京キモノショー」への参加
- ・きものを日本の文化として発信していくこと(イベント、SNS等)

1. 教育理念・目標

評価項目	評価	評価内容	課題等
理念・目標・育成人材像は、定められているか。	4	定められている。	時代や社会情勢の変化も鑑みながら必要により改訂を検討していく必要がある。
学校における職業教育の特色が明確になっているか。	4	学校案内、WEBサイトにて打ち出し、企業と連携した授業内容を公表している。	業界で求められる人材像の変化をとらえながら、職業教育に必要な内容を検討していく。
各学科の教育目標・育成人材像は、業界のニーズに向けて方向づけられているか。	4	産学コラボを通して企業との連携を取ることで、学生の就職先の選択肢を増やすことや就職後に役立つ授業の編成に繋げている。	次世代に向けて、さらに企業との連携を深め、日本文化を国内だけでなく、世界にも発信していく。
学校の教育理念やポリシーは学内外に広く公表されているか。	4	学校案内、募集要項、WEBサイト等に明記し、公表されている。	次年度も同様に公開を続けていく。
コメント 各ポリシーについては、毎年再確認し、必要に応じて見直しを行っている。 また、SDGsに係る授業も拡充している最中である。			

2. 学校運営

評価項目	評価	評価内容	課題等
教育理念・目標に沿った運営方針が定められているか。	4	定められている。	引き続き、教育理念・目標に沿った学校運営に努める。
学校関係者評価を有効に活用できたか。	4	学校関係者評価報告書で指摘のあった内容および企業講師の方々からいただいたご意見をカリキュラムへ反映するよう努めているが、まだ検討中のものもある。	引き続き、貴重なご意見をカリキュラムに反映していく。
入学定員は適正に設定されているか。	4	教員の目が十分に行き届く範囲内の人数で募集できている。	入学定員に対して十分な学生数を安定的に確保していくことが課題である。
効果的な教育成果を得ることを目的として教育課程の見直しがされたか。	4	企業人外部講師と連携してカリキュラムを作成し、成果を上げることが出来た。 学生のモチベーション維持に繋がったと考える。	この体制を引き続き維持していく。
各種検定の合格率向上のためカリキュラムの再確認及び改訂が行われたか。	4	各種検定合格に向けた講座を授業内に設け、検定の実施も学内で行える体制を整えている。	学生間による学力差をどう埋めていくのかを検討し引き続き指導に当たっていく。
外部講師等の存在を学校・学生のために有効に活用できたか。	4	企業人を外部講師として迎え授業を行っており、卒業後の学生の就職先としても受け入れていただいている。	企業人講師による授業の更なる拡充。
コラボ企業や就職先等から教育ニーズを聴取したか。	4	各企業と連携したコラボ授業を実施する中で聴取している。また、企業の方に直接ご来校いただき、学生とのコミュニケーションの機会を提供いただいていることで、学生の視野が広がったように考える。	引き続きこの環境を維持していく。
情報システム化等による業務の効率化が図られているか。	4	教科書のデータ化計画が整い、校舎内の通信環境も整備されている。	DXは一定程度進んでおり、引き続き整備していく。
コメント 日本の伝統文化として着物を後世に伝えていくには、企業人による協力が必要不可欠である。会社見学を兼ねた授業を行っており、今後も連携を強め、学校運営に関するご意見を取り入れていく。			

3. 教育活動

評価項目	評価	評価内容	課題等
教育理念に沿ったカリキュラムになっているか。	4	なっている。	今後もこの姿勢を継続していく。
教育カリキュラムは体系的に編成されているか。	4	毎年修正を加えながら体系的にカリキュラムが編成されている。	今後もこの姿勢を継続していく。
キャリア教育・実践的な職業教育の視点で、カリキュラムや教育方法の見直しがなされているか。	4	企業コラボからのフィードバックや、企業人講師からの意見を聴取し、都度見直しを図っている。	今後もこの姿勢を継続していく。
実践的な職業教育が体系的に位置づけられているか。	4	教育課程の適切な時期に企業コラボを盛り込むカリキュラムを工夫している。	コラボレーションを質・量ともに充実させていくことが課題である。
成績評価・単位認定の基準は明確になっているか。	4	成績評価・単位認定の基準は学則に記載されており、明確になっている。年2回成績表を学生に情報共有している。	引き続き適切に行っていく。
教員間で様々な悩みについて共有できる職場環境であったか。	4	日常的にコミュニケーションをとりやすい環境作りに努めている。	引き続きより良い職場環境を整え、教員のモチベーションを高めていく。
教員のスキル向上のための研修や自己啓発は推進できたか。	4	技術研修を実施し、教員のレベルを必要な水準以上に保つようにしている。	引き続きこの姿勢を継続していく。
コメント 教育カリキュラムの一環として産地研修などを取り入れた授業を実施している。教員の技術力、人間力のレベルを向上できるように努め、それぞれの個性も生かし、学生の対応にあたっている。			

4. 学修成果

評価項目	評価	評価内容	課題
生活支援の充実化は図れたか。	4	奨学金制度は要項などが届くたびに学生達に紹介した。	今後もこの姿勢を継続していく。
教育支援の充実化は図れたか。	4	教員は授業終了前に必ず質問があるかを学生に尋ね、放課後、質問のあった学生に対しての指導を行っている。	より学生が質問しやすい環境作りに努める。
就職支援の充実化は図れたか。	4	1年次より合同の就職ガイダンスを行いながら、個々の目標や進路検討状況に応じた就職相談を常に受けている。	卒業生への就職支援は充実しているが、十分に活用はされていないため、周知の方法を再検討する。
コメント 今の学生にとって必要な支援が必要なタイミングで出来るよう、個々の学生の背景と社会の動きに常に注意を払うことが教員にとって必要だと認識している。在学中に利用するWEBシステムを通して情報公開をおこなっている。また、メッセージ機能での相談窓口にも繋がっている。			

5. 学生支援

評価項目	評価	評価内容	課題
退学率の客観的数値(前年度比較)は改善したか。また、退学原因の分析と対応策の検討、実施はされたか。	4	昨年と比較すると退学者は半減した。学生ひとりひとりが複数の先生と関わり相談できる環境作りに努めた。	通信制の学校に通っていた学生を中心に、これまで通学の習慣が無かった学生のメンタルケアを検討していく。
学生のメンタルヘルス対応は積極的に取り組めたか。	3	外部の専門機関と連携したメンタルヘルス相談体制を整備している。	相談体制の認知向上に努めていく。
卒業生への支援体制はあるか。	3	既卒者への就職指導も継続して行っており、実際に利用した卒業生がいた。	まだ実績が多いわけではないので、周知を強化し、より卒業生に浸透させていく。
家庭との連携は適切だったか。	4	メール配信等で家庭との繋がりを密にしている。必要に応じて個々の家庭と連絡を取り合い、対応にあたっている。また、対面での保護者会も実施した。	今後も対面での保護者会の機会を設けることで、より密なフォローを行っていききたい。
コメント メンタルに問題を抱えている学生が一定数いるが、家庭と連携しサポートを続ける。学校としては学びの環境を維持し、卒業・就職へと繋がるようにフォローを続けていく。在学中に利用するWEBシステムは卒業後も利用できるもので、卒業後のコミュニケーションに活用していく。			

6. 教育環境

評価項目	評価	評価内容	課題
卒業生・在校生・学校間のネットワーク構築への取り組みについて進捗・改善は見られたか。	4	WEBを活用した就職・転職支援を行っており、在校生卒業生問わず利用可能となっている。	特になし。
施設・設備は、教育の必要性に十分対応できるよう整備されているか。	3	防災に対する水、食糧など備蓄品の確保は十分に成されている。有事の際の必須知識として、学校近隣の避難環境を実際に歩きながら説明をした。	防災に対する施設の補強を整える。また、和裁用具の生産が縮小される中で、変わらない製作環境の維持が課題である。
コメント 特になし。			

7. 学生の受入れ募集

評価項目	評価	評価内容	課題
オープンキャンパス(OC)参加者の増加は達成できたか。	4	OC参加者が増加した。	引き続き広報と連携し、遠方からでも学校について知れる機会を増やしていきたい。
OCからの取り込み率は向上できたか。	4	取り込み率は向上した。	OCの限られた時間の中で、本校の魅力を充分に感じてもらえるような工夫をしていきたい。
OC時の参加者対応スキルの向上は図れたか。	4	参加者には学生・教員で、丁寧に対応している。在校生が学校の授業の様子や実習内容を参加者に話している。	在校生は笑顔で対応している。今後も在校生の協力を得て、この姿勢を継続していく。
OCの結果等の分析や、コース内容のブラッシュアップ等について学校と広報とで十分な意見交換ができたか。	4	広報と意見を交換しつつ、リピート参加でも楽しめるようなイベント作りを心がけている。	参加者の目線になって可能な範囲で内容をブラッシュアップしていく。
学生募集における学校の訴求ポイントについて広報と協議の上で決められたか。	4	企業コラボレーションを中心とした実践的なカリキュラムを強めとし、広報と意識を共有し発信できた。	入学検討者にとってより魅力のある内容のカリキュラムを引き続き分析していきたい。
広報物の訴求の一貫性を図れたか。	4	DMの内容を少しずつ変化させより多くOCに参加してもらえるよう取り組んでいる。	効果的なDMの見え方を今後も検討していく必要がある。
広報物の制作にあたり、学校と広報とで意見交換が図られたか。	4	広報担当者は度々職員室に訪れて情報共有やお互いの問題点を話し合っている。	今後もこの姿勢を継続していく。
広報担当スタッフとの連携を強化できたか。	4	OCの前日、担当者と参加者の情報を共有している。	もっと学校の魅力が発信できるように話し合い共有していきたい。
SNS等、学校の認知PRは適切に行えたか。	4	インスタグラムの更新や、学校を紹介する動画をYouTubeにアップして外部の人々に学校を知ってもらえるように努めている。	SNSをより活用し、認知の幅をさらに広げていきたい。
コメント 従来の「日本人」「高校新卒者」にとらわれず、きもの・和裁に興味を持つ幅広い層をターゲットとして学校の魅力が訴求できるように工夫に努めたい。 留学生の受け入れ態勢を整え、担当スタッフによる個別対応を行っている。			

8. 財務

評価項目	評価	評価内容	課題等
経営感覚の教職員間での共有は図れたか。	4	全員で学校の収支状況を共有し状況が悪いことは全員自覚している。学生数を増やし支出を押さえる意識を持っている。	外にアピール出来る新しいことを如何に支出を抑えて、かつ教育の質を下げない様に実行するか考える必要がある。
会計監査は適正に行われているか。	4	1年を通じての監査法人による証憑のチェック及び会計監査が実施されており、法人の監事を交えた意見交換も定期的に実施されている。	引き続き公正な会計管理が行える体制の維持に努める。
コメント			
法人WEBサイトに財務計算書類を適切に公開している。			

9. 法令等の遵守

評価項目	評価	評価内容	課題
コンプライアンス意識を再確認できたか。	4	「コンプライアンス規程」を明文化し、教職員間に意識の共有を図った。	今後も、現代の社会情勢を鑑み、明文化した内容の改訂を必要に応じて行っていく。
自己評価の結果を公開しているか	4	自己評価を行い、現状の実態の把握・理解、問題点の改善に努めている。	今後も適切な情報公開に取り組んでいく。
コメント			
引き続き必要な学校情報について公開し、公正で適切な学校運営を継続させていく。			

10. 社会貢献・地域貢献

評価項目	評価	評価内容	課題
地域や地方公共団体と連携した企画を積極的に実施しているか。	4	学園祭では地域の方にも和文化を体験していただけるような企画を行った。【アールブリュットNakano】では作品展示を行った。	今後も地域貢献に繋がるようなイベントには可能な限り参加したい。
コメント			
引き続き、地域と連携した企画にも可能な範囲で取り組めるように努める。伝統産地が取り組むイベントに参加し地方団体への貢献も行っている。			

11.国際交流

評価項目	評価	評価内容	課題
国際交流を推進する体制は整備されているか。	4	コロナで中断していた海外研修を再開し、マレーシア研修を実施。現地の学校で着物ショーを行った。	今後もSNSで発信を続けるなど、国外の方にも着物の魅力を感じてもらえる機会を作っていきたい。
コメント 文化交流を通し、日本文化を伝えと共に関手の文化を知る良い機会となった。マレーシアでは自由行動の際も着物を着用し、積極的に「日本の着物」のアピールに努めた。			

おわりに

数少ない「着物」「和裁」の高等教育機関として、業界と連携した授業に積極的に取り組んでいる。着物の良さを身近に感じてもらうように日本だけでなく世界に向けてもSNSや海外研修等を通じて発信している。今後も、伝統としての着物を後世に残すことの意義や、それを担う教育機関の責任を意識し、新しい着物の魅力を見出し、「日本文化としての着物」を積極的にPRしていく。そして、きものを次世代へ繋ぐ、確かな技術と知識を備えた人材の育成を行う。

一方、着物・呉服業界低迷の影響を学校も少なからず受けており、学校運営の厳しさが一層増したことは否めない。しかし、そんな中であっても本校が提供する教育の質をさらに上げていくことは変わらない命題としたい。

今後は業界全体を盛り上げるべく、企業との連携をより強くし、教育の質の向上や学生募集、就職に繋げていけるように努めたい。

2024年度に関しては、デジタルでのきものデザインの授業を企画し、企業デザイナーの方に協力を仰いで実施した。今後も継続予定である。